

多峯主山の御嶽信仰

飯能市立博物館 学芸職員 村上 達哉

御嶽信仰とは、木曾御嶽山を聖峰と崇める山岳信仰です。その信仰を江戸時代以来伝えてきたのが御嶽講で、修験道を母体とし成立しました。修験道と大きく異なるのは、講の活動を担うのが修験者という宗教家ではなく一般の人々であるという点です。



図 1 清瀧と石塔



図 2 道標・清瀧道・清瀧などの位置関係

飯能市域にも、秩父御嶽神社をはじめとし御嶽信仰の神社があり、今回取り上げる御嶽八幡神社(奥宮)は多峯主山中腹の前岩の上にあります。

前岩のそばに神様が祀られたのは、言い伝えによると江戸時代末期に与平という人物が山仕事の途中、前岩のあたりで昼寝をしたところ気付くと麓にいたという不思議な目に遭ったため、これを自らの屋敷内に祀る金毘羅様の御神意によるものとし、金毘羅社を祀ったのが始まりとされています。

その後、明治の初め頃に御嶽信仰が盛んになり、明治 4(1871)年に先達の小川某が木曾の御嶽神社の分霊を前岩の金毘羅社に祀り御嶽神社とし、丸田開元という人物が中心となって社を再建し、御嶽信仰を広めました。明治 40(1907)年頃まで「大変に栄えた」と言われています。

多峯主山での御嶽信仰に関しては石造遺物からも知ることができます。能仁寺西側にある、多峯主山への登山道(天覧入り)を少し入った道の脇に、道標が 1 基立っており、正面に「陽雲山清瀧道」、右側面に「是より十三丁余」、左側面に「時明治四辛未八月吉辰」と刻まれています。

そして天覧入りから多峯主山頂近くまで登った雨乞池の手前に、露出した岩肌を池からの水が伝い落ちている所があります。水に濡れる岩の前は平坦な場所になっており、石塔が 1 基立っています(図 1)。正面に「清瀧開基寄進」、右側面に「明治四辛未年八月吉日/武州多摩郡黒澤村」、左側面に寄進者と思しき 16 名の方の氏名が刻まれています。石塔の存在から、この場所が清瀧と思われまます。「清瀧」という名称は、木曾御嶽山の王滝登山道から登って 3 合目にある清滝と一致しています。

天覧入りの道標に刻まれている「陽雲山」は、多峯主山麓にある御嶽八幡神社(里宮)境内に本郷自治会によつ

て立てられた看板の内容から、現在の御嶽八幡神社(奥宮)を指していることが分かります。

つまり、明治 4 年に金毘羅社が御嶽神社(陽雲山御嶽神社)になり、同年 8 月に黒澤村(現在の東京都青梅市大字黒沢)の 16 名の方から清瀧が「開基寄進」され、多峯主山における御嶽信仰の聖地が形作られたと考えられるのです。

【参考文献】

埼玉県神社庁神社調査団『埼玉の神社 入間 北埼玉 秩父』埼玉県神社庁 昭和 61(1986)年
 菅原壽清・時枝務・中山郁 編『木曾のおんたけさん その歴史と信仰』岩田書院 平成 21(2009)年